



2012年1月8日

いま起きつつあること...



悔い改めの一步として

神学社会委員会はこれまで「原発」の問題についてまったく取り組んできませんでした。これまでに多くの人がその危険性について指摘していたにもかかわらず……。「今私達は、極めて単純なことを確認するべき時である。それは、誰が正しい予測をし、誰が誤った予測（あるいは虚偽の予測）をしたか、ということである」（北博「預言者と偽預言者」、『福音と世界』2011年11月号）。

私たちは神学社会委員会の悔い改めの一步として「原発」

背筋が凍る思い

この本はこれまで原発の危険性に警鐘を鳴らし続けてきた14名が、福島第一原子力発電所（以下、「福島原発」）の事故を検証し、現在非常に大きな問題となっている「核のゴミ問題」に端的に示されるように原発がいかに「不完全な技術」であるかなど、原発の問題性を多角的に考察しています。また原発を終わらせるための具体的な道も最終章で提案されています。

委員会で本書を読んだ直後の第一声は「背筋が凍る思いがした」でした。何人かの筆者が未曾有の大惨事となった今回の原発事故よりもっと過酷事故になった可能性を記

され、そうならなかったのは「偶然」であり、「運がよかった」との指摘に目が覚めるような思いになりました。

余震一つとってもそうです。今、福島原発周辺で激しい余震が起り、原発に破局をもたらす可能性もあります。「そうならないためには、ひたすら祈るほかない」という本書の言葉にふれ、私たちは「主よ、憐れんでください」と祈りへ導かれました。

キリスト者として真摯に

私たちは科学者でも、経済学者でも、地震学者でも、まして原発の専門家でもありません。専門家たちはそれぞれの立場でいろいろな意見を言います。しかし、私たちはキリスト者として「今、起こっていること」、放射能によって大地は汚染され、食の安全が奪い取られ、多くの人が故郷を奪われる現実に真摯に目

を向けなければなりません。預言者エレミヤは偽預言者ハナンヤとの対決において、「平和を預言する者は、その言葉が成就するとき初めて、またことに主が遣わされた預言者であることが分かる」（エレミヤ28・9）と語り、南ユダが破滅に向かう中で安易に明るいう未来を語る者を偽預言者として非難しました。

「もし、日本社会がこのとき理性と感性と想像力を最大限に働かせていけば、運転歴30年を超える福島第一原発の全6基は運転終了したかもしれない」。石橋氏は2007年に発生した新潟県中越沖地震で発生した柏崎刈羽原発事故の警告を生かせなかったことを「痛恨の極みである」と告白されています。

私たちは「理性と感性と想像力を最大限に働かせて」原発の問題に向き合うためにも『原発を終わらせる』を一読されることをお勧めします。